サグラダ　ファミリア　Sagrada Familia（Web 版）

カトリック水戸教会会報 2019 年 10 月号

わたしたちの母であるマリア

カトリック水戸教会主任司祭　ウィリアム・ドネガン神父

9 月は、わたしたちの祝福された母の誕生日を祝う月です。そして 10 月はロザリオの月です。ロザリオはバラの冠です。そしてバラは美しく良い香りがしますが、また棘を持っていることを私たちは知っています。わたしたちがロザリオの祈りを唱える時、その花々は、イエスとマリアの喜び、悲しみ、光と栄えを示しています。

喜びの玄義は、マリアの生活の中で起きた出来事です。マリアは天使に会いますが、そこで自分が救い主を産み、産んだ子をイエスと名付けることを知らされます。その子は成長し、わたしたちに天の父への道を示す教師、指導者となりました。

苦しみの玄義は、イエスの苦しみを詳しく示しています。イエスは死刑を宣告され、いばらの冠をかぶせられ、十字架上で死にました。今、病院のベッドには、力なく痛みの中で横たわっている多くの病者がいます。イエスは、十字架上で苦しんでいる時、自分の無力を感じました。しかし、自分を十字架にかけた人々を赦しました。

光の玄義は、イエスの生活の中での主だった出来事を語っています。その出来事とは、ヨルダン川でのイエスの洗礼、カナの婚礼、そしてわたしたちのための聖体の制定です。

栄えの玄義は、イエスの復活と昇天を祝っています。イエスは、聖霊降臨の日に、使徒たちの上に聖霊を送りました。マリアは天に上げられて、わたしたちの母としてすべての人々に与えられました。

２０１９年度さいたま教区茨城県地区「平和旬間の集い」

８月１２日に水戸教会にて開催され、暑さ厳しい中、茨城県内の各小教区から総勢 100 名以上の参加者が集まり、冷房の効いた聖堂で平和を考えるひとときを過ごしました。
また、さいたま教区からは山野内司教様ほか２名。イエズスマリアの聖心会から本間管区長ほか 6 名。三位一体聖体宣教女会から長谷川院長ほか３４名のシスターが参加して盛大に行われました。

「平和旬間の集い」は①戦争童話 DVD「ちいちゃんのかげおくり」の鑑賞、②山野内司教様の講話、③みころ聖歌隊の「地上の祈り、大地讃頌」合唱が行われ、「平和の大切さと在

日外国人の方々への心配りの大切さ」について考え、参加者一同は心を新たにし、平和を分かち合うことができました。

【DVD 戦争童話鑑賞】　【山野内司教様のご講話】　【みこころ聖歌隊の合唱】

「平和祈願ミサ」はマリオ山野内倫昭司教の司式で 7 名の司祭と２名の助祭によって行われました。

【入祭】　【説教】　【派遣の祝福】

ミサ後には信徒会館にて軽食を頂き、司教様のギターを愉しみ、感謝のうちに散会となりました。

第１０回マリアンフェスティバル開催

9 月 22 日、前橋の群馬会館にて、第 10 回マリアンフェスティバルが開催されました。今年のテーマは「マリア様、若者たちの模範と道しるべ」です。今年のフェスティバルは、浦和大聖堂の建設の支援とフィリピン人移民を支える NGO への募金を目的として実施されました。午前中は、ロザリオの祈りとミサ、午後は歌にダンスなどのアトラクションが行われ、水戸教会からは、インターナショナルクワイアが、「Inay」という合唱を披露しました。Inay とは、お母さんという意味です。聖母マリアへの崇敬、母への思いを込めた美しい歌です。信仰を深め家族を思う一日となりました。

ボーイスカウト　キャンポリー報告

水戸市近辺のスカウトたちにより、8 月 8～11 日　内原のアスパイアで「一緒にスカウティングをしよう」というテーマでキャンポリーが行われた。

小学生から高校生までの各年代のスカウトが、一堂に会し、日々の活動の成果を発揮し、友情を深め、自然の恵みに感謝する 4 日間でした。

会期中、宗教儀礼のプログラムがあり、ホルヘ助祭に司式していただき、集会祭儀を行った。説教では、ほとんどのスカウトが未信者であったが、プロジェクターを使いミサについて話された。

スカウトの日の活動報告

9 月 16 日(月・祝)社会の中でひとの役に立つ活動を全国のボーイスカウトが一斉に行う「スカウトの日」の活動を実施しました。水戸 5 団では、ユニクロとボーイスカウトが協力して進めている、難民支援衣類回収の活動を実施しました。

水戸 5 団のメンバーやその友人だけでなく、友好団やカトリック水戸教会のみなさんなど、たくさんのかたにご協力いただき、1,479 着をこの日に集めることができました。その後に追加された衣類を合せ、9 月末日に 1,550 着をユニクロ店舗にお届けし、その後、難民支援にあてられます。ご協力ありがとうございました。

また、この日は街中清掃も予定していましたが、あいにくの雨のため活動を延期、9 月 23 日(月・

祝）に実施しました。台風の影響が残る街中のゴミを拾いながら、ベンチや公衆電話といった、街中のだれもが使う「みんなのもの」をみつけ、きれいにする活動を通して、スカウトたちが街を大切に思う経験ができました。

敬老の集い報告

9 月 8 日、21 名の出席者をお招きして、敬老の集いが海佐愛され、ミサの中の塗油の秘跡では皆さんの体と心の健康を共に祈り、ささやかではありましたが、茶話会で和やかに歓談しました。

今後の課題として、なるべく高齢の方のお身体に負担のないような形で、席の準備や案内の方法に工夫が求められるかもしれません。ご案内をしても参加されない方も多くなってきているので、ご案内の方法等についても検討したいと考えています。

皆様からも、ご高齢になられた信者さんの情報を総務部、福祉部にお寄せいただけるとありがたいです。よろしくお願いいたします。

【仮放免不許可処分取消および仮放免許可義務付け請求事件】のその後

2 年半前から、水戸地方裁判所で行われた、「仮放免不許可処分取消・・・」に関して、水戸教会の皆様に裁判傍聴をしていただき、昨年には多数の署名をしていただきました。結果不当判決の結審となりましたが、その後のハルデスさんご一家の状況をお知らせします。

フィリピン国籍のバルデスさんが、妻のリサさんとともに今年 7 月 9 日フィリピンに帰国されました。息子さんのジェイ君が高校に入学した直後に収容されたバルデスさんが、一度もジェイくんと一緒に食卓を囲むこともなく帰国させられてしまったことは残念でなりません。

ジェイ君は、6 月に在留資格「留学」1 年が付与され、上智社会福祉専門学校でがんばっています。

カトリック東京国際センターより

「三位一体の聖体宣教女会」の紹介

“わたしは神に一つのことを願い求めている
生涯神の家をすまいとし
あかつきとともに目ざめ
神の美しさを仰ぎみることを“ （詩編 27）

現在、日本には100の女子修道会があり、それぞれの修道会の創立者のカリスマによって、特色ある修道会が創立されました。その中の一つ、「三位一体の聖体宣教女会」について紹介いたします。

その1。「本会の歩み」について

本会の創立者、パウロ・マリア・グスマン神父は、「三位一体の聖体宣教女会」の使命と目的を、聖霊の導きによって明確に定め、この霊性に生き、本会の使命を果たすために、エンリケタ・ロドリゲス女史と共に、１９３６年１１月２０日メキシコ市に修道会を創立しました。
同年、メキシコ市の大司教の許可のもとに、信徒使徒職のリーダーの養成所を各地に開き、モレリア市においては、カテキスタ学院が設立されました。更に、メキシコ、タンピコ、ベラクレス市に、小・中・高等学校、及び貧しい子女のための教育も始めました。
１９４６年３月２５日、メキシコ大司教により、司教座に属する修道会として認可されました。
２０１９年現在、メキシコ国内にプエブラ、グアダラハラ市など１０カ所に修道院があります。
１９４８年、中国 Ankinng の大司教の招きで８名のシスターがメキシコより派遣され、Hofei に修道院を創立し宣教を始めましたが、共産革命のため１９５１年に修道院を閉鎖しました。日本への宣教は、１９４９年、広島教区の教区長、荻原　晃（イエズス会）神父様から本会のメキシコ本部の総長宛に、「今、日本の人々は戦後の荒廃した社会の中に生きています。信者も少なく、教会と子供たちの教育のために多くの司祭、修道者が必用です。」との手紙が届き、直ちに５名のシスターが来日、同年１１月２０日に下関修道院を創立し、１９５３年に「暁の星幼稚園」を開設、１９５４年に福岡修道院創立、「吉塚カトリック保育園」を開設しましたが、私たちは６０数年間の下関と福岡での使命を終え、指導をカトリック信者に引き継ぎ、現在も、カトリックの精神で幼児教育が引き継がれています。下関、福岡では教会奉仕と幼児教育の他、カテケジスと聖書を通して、みことばを伝え、また、地域の皆様との暖かい交流も深めていました。
１９５３年にピオ１２世教皇の要望に従って、ボリビアの福音宣教に派遣され、現在、コンセプシオンとサンタクルスで小教区の奉仕、学校で宣教しています。また、１９５６年よりペルーのリマ市において学校教育とカテケジスを通して福音宣教を続けています。
１９６２年３月２５日に水戸修道院創立、５名のシスターが着任しました。
１９６７年にアメリカ合衆国、サン・ホセ市に修道院が開かれラテン・アメリカ系の信徒の養成と小教区への奉仕を通して本会の使命を果たすように努めています。現在、オレンジにも修道院があります。
１９７１年に東京東村山市に修道院創立、日本地区本部が下関より、東京修道院に移りました。当時の東村山は武蔵野の面影を残す静かな所でしたが、時代は変わり広大

な畑地は住宅地となり、創立当初から、使徒職として「祈りの家」を開設し、近隣の小平教会、清瀬教会、所沢教会、多摩全生園への奉仕もしていましたが、シスターたちの高齢化に伴い、使徒職と、修道院の美しい広い庭も縮小されました。
現在は、所沢教会のカテケジス、家庭集会、初聖体の準備に、また、多摩全生園には、典礼と聖体奉仕に、そして神奈川県の保土ケ谷教会に、本会の霊性の源である「十字架の使徒職」のグループの集会の指導に行っています。
１９８３年３月２５日に、御飥身のマリア（神のお告げ）の祭日に、ヨハネ・パウロ２世教皇によりローマ聖座に属する修道会として、最終認可を受けました。

「あなたたちの記憶に焼き付けてほしい。三位一体の聖体宣教女会会員として、何よりも大切にしなければならないのは、ミサの時間であり、ミサに生き、自分の生涯をミサとすることである。」　創立者　Pablo M.Guzman

＊その２．は「本会の使命と目的」についてお伝えいたします。

【10 月 20 日「世界宣教の日」教皇メッセージ】
「洗礼を受け、派遣される――世界で宣教するキリストの教会」
　わたしたちが神の子となるということは、個人としてではなく、つねに教会としての行いです。父と子と聖霊の三位一体の神との交わりから、他の多くの兄弟姉妹とともに新しいいのちが生まれるのです。この聖なるいのちは売り物ではなく――わたしたちは信仰を強制しません――、与え、伝え、知らせるべき宝です。それこそが宣教の意味するところです。わたしたちは無償でこのたまものを受け、だれ一人のけ者にせずに、無償で分かち合います（マタイ 10・8 参照）。神は、救いの普遍的秘跡である教会を通して、すべての人が真理を知り、ご自身のいつくしみを受けることによって救われるよう望んでおられます
　洗礼には、イエスが過越にあたって示した派遣の命令が本質的に備わっているのです。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもこの世の和解のためにあなたがたを聖霊で満たし遣わすと、イエスは言われました（ヨハネ 20・19－23、マタイ 28・16－20 参照）。キリスト者とは、このように派遣される人です。
　献金は、部分教会の福音宣教活動（信仰弘布会）、地方教会の聖職者の養成（使徒聖ペトロ会）、世界中の子どもたちの間での宣教意識の向上（児童福祉会）、キリスト者の信仰の宣教的側面の促進（宣教師連合）において教皇を支えています。

典礼に関連する祭具等についての勉強会

(9 月 22 日開催、講師:ホルヘ助祭様)

【教会暦(典礼暦)】

「聖なる教会は、一年を通して，一定の日に、キリストの救いのわざを想起して，これを祝う。毎週、教会は主日と呼ばれる日に、主の復活の記念を行い、また、年に一度、復活祭には もっとも盛大な祭儀を行って、主の幸いな受難とあわせて復活を祝い続ける。さらに、教会は 一年を周期としてキリストの神秘全体を展開し、聖人たちの誕生日(帰天の日)を記念する。」

【典礼の色】

典礼暦年は、その時期、特徴を示すために固有の色をもっており、祭服、ストラなどに用いられています。

典礼祭儀の際に使用する祭服、ストラの色は、教会の伝統に従い、典礼暦の周期(季節、年間、祝祭日など)によって用いられる色があります。

祭服、ストラの色は、通常白、赤、緑、紫の 4 色で、その他に黒、バラ色などがあります。

○ 白:神の栄光、清らかさ、喜びを意味し、表現する祝祭日に用いられます。

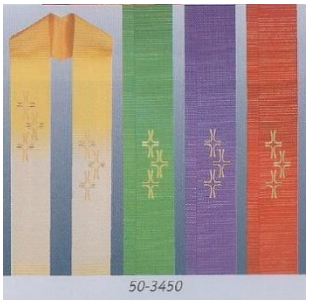
— 復活節と降誕節、受難の日以外の主の祭日、聖母マリア、天使、殉教者でない聖人の祝祭日、諸聖人(11/1)と洗礼者ヨハネの誕生(6/24)の祭日、 聖ヨハネ使徒福音史家(12/27)、聖ペトロの使徒座(2/22)、聖パウロの回心(1/25)の祝日です。

● 赤:火、愛、殉教を示すシンポルと言われています。

— 受難の主日、聖金曜日、 聖霊降臨の主日、主の受難の諸祝日、使徒および福音史家の帰天の日、殉教者諸祝日で用いられます。

● 緑:希望、歩みの堅実さ、忍耐深く聞くという意味があります。

— 年間の典礼に用いられています



● 紫:償い、回心、節制、待つこと、死者の贖罪と死者のための贖罪と祈りを表します。

— 待降節、四旬節に用いられます。 また、死者のための典礼にも使用されます。

【カリス（聖杯）】
ミサの時にイエス・キリストの聖血（ブドウ酒）を入れる杯です。聖血が直接触れるので、液体を吸収しない材料で作られており、多くは金メッキされています。またカリスを聖具として使用する場合には、司教による聖別が必要です。

【プリフィカトリウム（清浄布）】
白の亜麻布でできています。ミサの時、聖体拝領後に司祭の指やカリス、パテナを拭くために使用します。

【パテナ（聖体皿）】
基本的には、カリスと同じ材料で作られた平皿で、聖体（ホスチア）を乗せます。カリスの直径よりも大きいものと定められています。司教が聖香油で聖別してから、聖具として使用します。

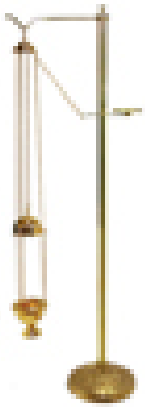
【パラ（聖杯布）】
ミサの時に、カリスをおおう亜麻布を張った正方形の厚紙です。

【コルポラーレ（聖体布）】
ミサの時に広げて、この上にカリス、パテナなどを置いて使用する白い亜麻布です。

※通常、これらの聖具は、上から
コルポラーレ、パラ、パテナ、プリフィカトリウム、カリスという順番で
準備されます。

ぶどう酒入れセット
葡萄酒：神　水：人が少し混ざる

香炉
煙が神に届くよう！



香炉掛け

アルバ

カズラ（テントのように覆う）

カッパ　プルヴィアレ
（聖体賛美式･聖木曜日）

チングルム

クシス(ご聖体　携帯)

鐘　カンパヌラ

聖水器

潅水棒

日本キリスト教海外医療協力会岩本直美ワーカー活動報告会

日本キリスト教海外医療協力からバングラデシュに派遣され、現地でラルシュのリーダーを務められている岩本直美さんの報告会を 10 月 27 日（日）ミサ後開催致します。タイトルは「弱さがつむぐいのちの物語」です。岩本直美ワーカーは麹町聖イグナチオ教会所属のカトリック信徒です。

ラルシュとは

ラルシュ(L'Arche)とはフランス語で『箱舟』を意味します。フランス系カナダ人でカトリック信徒のジャン・バニエ氏が、知的ハンディを持つ人々と持たない人々の共同体として1964年にフランスのトロリー村で創設しました。現在では約150のコミュニティーからなる国際的なネットワークであり、日本では静岡に「ラルシュ かなの家」があります。バニエ氏は今年の5月に90歳で帰天されましたが、教皇フランシスコは彼の葬儀に際し「神は、キリストを介して、わたしたちのすべての弱さをご自分に引き寄せられ、ジャン・バニエはそのキリストと一致して生きることを求めました。彼は、拒絶されがちな最も弱い人々が、宗教や社会的立場を超えて、兄弟姉妹として認められ、受け入れられるよう尽くしました」とメッセージを送られました。

日本キリスト教海外医療協力会とは

1960 年に創設された日本で最も古い NGO(非政府組織)の一つです。日本が第二次世界大戦において犯した戦禍に対する贖罪の気持ちから当時のキリスト者の医療従事者によって設立され、約60年の歴史の中で77名のワーカーをアジア、アフリカの11か国に派遣してきました。岩本直美さんは1993年に日本キリスト教海外医療協力会からバングラデシュに派遣され、現在まで現地で活動を継続されています。

広報部からのお知らせ

新しい教会ホームページの立ち上げと教会のパソコンの更新に伴い、今後教会宛て電子メールは info@catholic-mito.com までお願い致します。